

卒業後のキャリア形成に及ぼす要因の検討 (3)

Investigation on factors affecting to the career formation after graduation (3)

岩瀬 靖彦¹, 本田 周二², 吉田 真知子³, 佐藤 祐子⁴, 戸田 里和⁵, 伊藤 陽子⁶
Yasuhiko Iwase¹, Shuji Honda², Machiko Yoshida³, Yuko Sato⁴, Satowa Toda⁵ and Yoko Ito⁶

¹大妻女子大学家政学部, ²大妻女子大学人間関係学部, ³東京聖栄大学健康栄養学部,
⁴東京医療保健大学医療保健学部, ⁵奈良県立大学地域創造学部, ⁶山梨学院大学健康栄養学部

キーワード: キャリア形成, 学生生活, ギャップ

Key words: Career formation, Campus life, gap

1. 研究目的

本研究は2018年度, 2019年度の共同研究プロジェクトの継続研究である。現在の日本における大学では, 進学率の向上などにより多様な学生が入学するようになっており(いわゆる, 大学全入時代), その結果, 学生の質の変化(将来の職業や学修への自覚の欠如)が指摘されている。また, 産業構造や就業構造の変化といった社会全体を通じた構造的な問題も生じている中で, 近年, 大学に対する社会的な要請が大きく変わりつつある。

その一つの大きな柱が大学の教育改革(教育の質保証)である。大学教育・授業を取り巻く様々な環境整備(学生による授業評価, ファカルティ・ディベロップメント, GPAによる厳格な成績評価など)を行い, 学生にしっかり勉強させる, 学生がわかるような授業をすることを大学はこれまで以上に求められている(溝上, 2006)。このように, 大学の教育改革には様々なものがあるが, その中でも現在, 特に重要視されているのは, 卒業時の質保証であろう。卒業後に活躍できる力を在学中にどの程度身に付けることが出来たかについては, 大学教育の質に直結する問題であり, 大学の生き残りという視点からも重要であると考えられる。

以上のような教育改革を学生の視点から考えると, 在学中の学びにより自分自身が望むキャリアを形成することが出来るのかが重要となる。学生は様々な動機で大学に入学し, 学びを深めているが, 多くの学生は, 卒業後に自身の求める進路に進むことを希望していると考えられる。そのため教育を大学は求められていると言える。一方, 進路意識や目的意識が曖昧なまま入学する学生も一定数存在しており(文科省, 2010), 入学当初希

望していた卒業後の進路が在学中に変化することも十分に考えられる。

このような学生がどのようなきっかけで進路変更を希望し, 自身の望むキャリアを形成していくのかについて理解することは, 卒業時の質保証を考える上で重要であろう。しかしながら, 在学中の学びと卒業後のキャリア形成との関連について明らかにした研究はあまり見られない。

上記の問題意識に基づいて, 申請者らは, 2018年度に学部4年生を対象に在学中の学びと卒業後のキャリア形成との関連について質問紙調査を行った。その結果, (1) 資格取得が主目的の学科・専攻に入学した学生は大学への満足度, 学びの意味づけが高いこと, (2) 資格が主ではなく, 入学時から進路変更をしなかった学生は, なんとなく大学生活を送った人が多いこと(3) 資格中心に大学生活を送った人は, 他の人たちよりも学びを活かした進路先を選択することができていたこと, などが明らかとなった。次に, 2019年度には, 大学(大学院)を卒業(修了)後10年以内の人を対象として, 在学中の学びと卒業後のキャリア形成との関連について量的・質的に検討するためにWeb調査およびインタビュー調査を実施した。その結果, (1) 大学(大学院)を受験しようと思った理由としては, 興味のある専門知識, 技術の習得が一番多かったこと(2) 約半数が在学中に取得した資格や免許を活かして仕事をしていること, (3) 一方で, 6割以上が在学中の(資格や免許ではない)学びを現在の仕事に活かしていないと考えていること, などが明らかとなった。

このように過去2年間で, 卒業時, 卒業後を対象として, 在学中の学びとキャリア形成との関連

について検討を行ってきた。これまでの結果から、当初想定していた通り、必ずしも入学時の興味関心のまま、それぞれのキャリアが形成できていないことが明らかとなっていった。また、1年生の段階で、入学時の興味関心からの変更を意識する学生たちが一定層いることも明らかとなった。しかしながら、これまでの研究の調査対象者は、大学4年生および卒業（修了）生であり、入学時のことを正確に思い出すことは難しい側面もあったと考えられる。そこで、本研究では、大学1年生を対象として、入学前の興味関心と入学後に実際に学びを進めていく中で感じたギャップについて複数の大学を対象とした調査により明らかにすることを目的とした。

2. 研究実施内容

現在、まだ調査を実施している途中であるため、現段階での実施内容について報告する。

調査対象者：日本全国の大学1年生250名（男性70名、女性180名）、平均年齢19.08（ $SD=0.63$ ）歳であった。

調査内容：(1) 年齢など基本的属性、大学への志望度・志望動機、現時点での満足度、入学前後の大学への印象 (2) 高校での学び、進路指導の機会、大学での学び (3) 主体的学習態度、TIPI (Ten Item Personality Inventory)、2つのライフ

3. まとめと今後の課題

現段階で得られた結果について、まとめて報告する。

大学への志望度：大学（大学院）受験時の志望度について、希望していなかった（44：17.6%）、あまり希望していなかった（41：16.4%）、やや希望していた（66：26.4%）、希望していた（99：39.6%）であった。

志望理由：大学（大学院）を受験しようと思った理由について、教養や視野の拡大（21：8.4%）、就職に有利（32：12.8%）、興味のある専門知識、技術の習得（84：33.6%）、施設や環境が充実（14：5.6%）、結婚に有利（1：0.4%）、免許・資格取得（26：10.4%）、将来の安定した生活（13：5.2%）、家族のすすめ（8：3.2%）、先生のすすめ（12：4.8%）、周りの人が行くから（3：1.2%）、特に理由はない（28：10.4%）であった。

大学に関する満足度：大学に関する満足度につ

いて、満足していない（26：10.4%）、あまり満足していない（63：25.2%）、やや満足している（84：33.6%）、満足している（77：30.8%）であり、約6割が教育に満足していた。

高校での進路指導経験：高校での進路指導などで、就職や将来の生き方についてどの程度考える機会があったのかについて、まったくなかった（13：5.2%）、少しあった（89：35.6%）、まあまああった（85：34.0%）、かなりあった（63：25.2%）であった。

大学入学前後のギャップ：入学前と入学後で想像していたことと違うことがあったかについて、ある（212：84.8%）、ない（38：15.2%）であり、8割以上の1年生が入学前後でギャップを感じていることが明らかとなった。

入学前後のイメージの変化：大学生活に関して入学前と後でイメージの変化があったかについて、イメージしていたよりも悪かった（40：16.0%）、どちらかというイメージしていたよりも悪かった（109：43.6%）、イメージ通り（56：22.4%）、どちらかというイメージしていたよりも良かった（30：12.0%）、イメージしていたよりも良かった（15：6.0%）であり、6割近くの1年生がイメージしたよりも悪かったと回答していた。

2つのライフ：自分の将来への見通しに関して、持っていない（97：38.8%）、何をすべきかまだ分からない（20：8.0%）、何をすべきか分かっているが、実行はできていない（45：18.0%）、何をすべきか分かっているし、実行はできていないが準備はしている（58：23.2%）、何をすべきか分かっているし、実行もしている（12.0%）であり、1年生の終わりの段階で自分の将来への見通しを持っていない学生が4割近くいることが明らかとなった。

上記の結果は、新型コロナウイルスの影響を大きく受けている可能性が高く、当初想定していたものとは異なる結果となった。次年度は多くの大学で対面での授業が中心になることを踏まえて、改めて調査を行う必要があることが今後の課題である。

4. この助成による発表論文等

2021年度に学会発表および論文投稿を予定している。

付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所令

和2年度共同研究プロジェクト(K2012)「卒業後のキャリア形成に及ぼす要因の検討(3)ー入学前と入学後のギャップに着目してー」より研究助成を受け行ったものである.